

# 快速急行

RAPID EXP.

神乃木リュウイチ

## 町田駅 二三番線

駆け足で南改札をくぐったときには、既に発車案内から電車の名前が消えていた。俺は階段を一段飛ばしで駆け上がり、ドアの中の人の壁に突入する。直後にドアは閉まり、じらすようにポーズを置いてから電車が動き出す。

今学期、俺は毎週木曜日が嫌いで嫌いでしようがなかった。二限に法学の必修があり、混雑する電車に乗って授業に出掛けなければならぬ。あまつさえ法学の必修だってさほど楽しい授業ではないので、面白みも半減するというものだ。一年の二学期ともなれば、そろそろ先のことを考えなくてはならない。

道中かなり急いでいたからか、電車に乗ってから疲労が襲ってきた。膝に手をつけて息を整えたいが、車内の混雑がそれを許してくれない。きつと周りの乗客だって、「暑苦しい客が来た」とでも考えているに違いない。そう思うと、今すぐこの電車を降りてどこかに消えてしまいたかった。

それでも、高校の頃陸上部で鍛えていたおかげか、二、三分で息はだいぶ整い、携帯を触るくらいには疲労も回復した。テストが近ければ教材なり本なりを読むのだが、今日はそんな気分にもなれず、どうでもいいニュースをポチポチとめくりながら電車に揺られる。

あまり興味の湧かない漫画の特集記事をクリックすると、そこでサイトの読み込みが止まった。町田から新百合ヶ丘までの区間は、畑と住宅と山がローテーションするような風景で、山陰に入ると電波の入りが悪くなる。

俺は繋がり途絶えた携帯電話を閉じると、ズボンのポケットにねじ込んだ。いつでも繋がる、なんてモノは存在しない。

大学の友人も似たようなもので、学期中や授業の間は仲が良くても、夏休みに入った瞬間音信不通になる人間だっただけ多い。休みが明けてキャンパスで挨拶された時には、「白々しい奴だ」なんて内心毒づく癖に、こちらも白々しく「久しぶり〜」なんて返すものだから、結局お互い様だと思ってしまう。

と、そこまで考えていると、座席の客同士が子供の塾の話始めた。主婦仲間か何かだろう、子供の塾は週何回だとか、子供が数学が苦手だとかこぼしている。

いい年して親のことを気にするのはナンセンスだ、と高校時代の友人は言う。一般的に高学歴に分類される父は、自分の息子が法学部に行くものだと思われて疑わなかった。そして、事実その道を俺は切り開いてみせた。父は上機嫌だったし、母も大喜びだったので、「これで良かったのだろう」と俺は思い込むことにした。学費を出すのは両親だ。

俺は弁論サークルにも入り、返事の先頭を「いや」「しかし」で始めることも覚えた。うちの大学にはそういう人間が多いらしい。

今日の電車は、いつもよりよく揺れる。ふと、乗客の間から反対側のドアを見ると、コア色の車体が軽快に通過していくのが見えた。十月のこの頃であれば、ロマンスカーで箱根あたりに出かけるにはちょうど良い日頃のはずだ。

箱根といえば、夏休みの自動車学校を思い出す。

自動車学校では、昔の友人達と再会した。高校の頃毎日のようにつるんでいた友人は、難関の私立大に入ったらしい。彼は、俺と違って友人をたくさん見つけ、早速できた彼女と共に充実した毎日を送っているらしかった。

ある日は、週末雨なのが嫌だ、と教習所の待合室でこぼした。理由を訊くと、週末は彼女と箱根だからさ、と答えた。この手のさりげない自慢は嫌いだったので、俺は興味無さそうに生返事を返したが、友人はその後も恋人の自慢話を続け、最後には「お前も頑張れよ」と都合の良い励ましをして教習に出掛けた。こうやって、人の関係性というのは変わっていくのかもしれない。

「この電車は新百合ヶ丘を出ますと——」

下北沢まで止まりません。俺は喉の奥で復唱した。電車は減速を始めて、新百合ヶ丘に到着しようとしていた。新百合ヶ丘を出てから、乗り換える下北沢までは約十五分。

俺は、この十五分が一番嫌いだ。

## 新百合ヶ丘駅 五番線

ドア付近に立っていたので、俺は人の流れに逆らえずにホームに一旦降りた。十月の午前中は、外にさえ出れば快適な空気を吸うことができる。この駅ではかなりの乗客が入れ替わるので、上手くすれば座ることもできるが、座席の前に立っていたわけではない俺にその権利はない。

やがて降りる人が一段落したところで、前の方から客が乗り始めた。俺は列の最後尾を歩き、再びドア付近に立った。背中からそれなりの圧力を感じるので、さつきより乗客は増えている。階段付近だったからか、俺の後にももう一人乗客が乗ってきた。更に、足の踏み場がなくなる。

自動放送と駅員の声による発車案内が行われ、扉が閉まろうとした、そのとき。

乱打するようなサンダルの音とともに、一人の女性客が舞い込んできた。直後、ドアが閉まる。ただでさえ混雑する車内に一人追加されたので、周りの乗客の空気は決して良いものとは言えなかった。彼女は俺の隣に立ったが、頭が俺の胸に当たるくらいの位置にだったため、俺は嫌な不安を覚えて両手をドアの上部に当てた。満員電車ではお互い様なのは分かっているが、それでも用心に越したことはない。俺は不自然な体勢でバンザイを強いられる形になった。これだから快速急行は嫌いなんだ。

早く着いてくれ、と俺は心から願った。

電波が復活したであろう携帯電話もこの状況では出せず、俺は仕方なく視線を泳がせることに集中した。

失礼にならない範囲で、先程駆けこんできた女性客に目をやる。髪は黒色のショートボブ、白系のブラウスに水色のロングスカート、そして革のハンドバッグか。大人っぽいファッションで固めているが、顔は子供っぽいので高校生あたりだろう。「無し」ではないタイプだが、こういう感じの子に限って遊んでそうなイメージもあるし、どうせ俺とは住む世界が違う。そんなことを考えてから、俺は彼女を思考のフレームから外した。

## 和泉多摩川駅 通過線

線路を走る電車の音が変わった。

登戸からは線路の数が増えるので、快速急行や急行はスピードを上げる。速度こそ気持ちの良いものの、電車は依然満員なので気分は全く晴れない。

一方外とはいえば、忌々しく秋晴れを醸しだしており、遠くの間々までくつきりと見えた。

橋を渡り終わるとすぐに駅がある。普段気にもしない駅だったが、ドアの窓越しに見ると駅名は「和泉多摩川」と言うらしかった。こ

のあたりから都内に出るのは面倒くさそうだな、などと考えていると駅を通り過ぎ、次に視界に入ってきたのは中学校だった。

車窓から見える新しくも古くもない中学校では、一番上の階のベランダに何人かの生徒が集まっていた。

と、その時だ。

中学校の三階から、白いものが一気に下ろされた。

それは垂れ幕のようなもので、陽の反射を受けて白く輝いている。一瞬だけ読めた垂れ幕には、次のように書いてあった。

“ 始めの一步 ”

漫画かよ。俺はさっきの携帯サイトを思い出しながら心の中でツッコミを入れた。

「ほんと、マンガみたいですよね」

「え？」

突然の声に俺はフリーズした。

電話でもしているのかと思って隣を振り返ると（厳密には下を向くと言っても良い）、さっきの彼女が俺の方を見て笑っていた。

えーと。一瞬悩んでから、普通を装って返すことにした。

「あれ、聞こえてましたか」

彼女は「うん」と言ってまた笑った。俺は恥ずかしさで顔が熱く

なった。

「でもおかしいですよ。普通運動会とかだったら、もう少し熱血な感じにするじゃないですか。どうして『始めの一步』なんて言葉にしたんだろう？」

彼女は気にもしない、という様子で話を続けた。彼女の声は若干高めで抑揚があり、電車の中でも聞き取りやすい。

「いや、最高責任者が漫画好きなのかもしれませんね」

最高責任者、と繰り返して彼女はまた笑った。何がおかしいのか分からないでいると、彼女はまた口を開いた。

「実はそんな漫画誰も知らなかったとか」

確かに。古い漫画だから、誰も知らないのかもしれない……と、納得しかけてから、まだ連載が続いていたのを思い出す。

「いや、でも結構有名ですよあれ」

「そうなんだ。読んだことあるんですか？」

彼女は大きな眼で見上げてきた。

「いや、そういうわけでも……」

俺は文頭の否定語を消すことに集中したくなった。

「タイトルくらいは知ってるんですけどね、中身はさっぱり」

「ですよ。アレ、結構長いみたいだし」  
「そういうえげな生まれたときくらいから連載している気がする。読んだこと無いけど。」

「でも、やっぱり垂れ幕にアレはおかしいですよ」

「そうですね」

俺が若干引き気味に答えたところで、電車はトンネルに入った。快速急行は成城学園前を通過する。ホームが終わったと思うと、電車はすぐに地上に戻った。

「どこの大学ですか？」

そんなに俺からは大学生オーラが出ていたのか。

「なんとなく、大学生っぽいし」

俺は事もなげに、「駒場の大学です」と答えた。

「なるほど……」

てっきり反射的に褒められるかとも思っていたが、彼女は唇に手を当てて考え込んでいた。もしかして高校生には大学名で言わないと分からなかったか。なんて考えていると、

「……何だか、つまんなそう」

彼女は不満そうに漏らした。問題をズバリ言い当てられてきょんとしているであろう俺に、彼女は続けて質問を重ねる。

「何年生？」

「えーと……一年ですわね」

「なるほどね。じゃあ、年下か」

「はい？」

今度こそ、俺は頭の中が真っ白になった。動揺が伝わったのか、彼女は心外そうに頬を膨らませた。

「うわあ、結構失礼な人」

どっちがだよ、とツツコミたくなかったが堪える。

「ちなみにそっちは？」

「一年。——ただ、一度入りなおしてるの」

元々理系の大学に進学したが、『合わない』と思って文学部に来た、と彼女は言った。

「だから、あたしはあんまり文学部らしくないんだけどね。どっちつかずな感じ」

彼女はそう言って黒い髪を片手で整えた。俺は少しだけ、新百合ヶ丘で持った彼女のイメージに罪悪感を覚えた。が、失礼な発言を思い出してそんな気持ちは霧消する。

「というか、『つまんなそう』ってどういう——」

だが、言いかけた時、間の悪い車内放送が鳴り響いた。

## 下北沢駅 二番線

外を見ると電車はだいぶ減速しており、工事区間をゆっくり走っていた。このまま下北沢に着かなければ良いのに、と俺は身勝手な願い事をした。

「いつもこの電車なの？」

彼女は手の平の付け根にある時計を見ながら言った。

「ああ、俺は二限に必修があるので——いつもこの電車ですか？」

名前を聞き損ねていることに気づいていたが、「あなた」も「君」も不適切な気がして、つい主語を抜いてしまう。

「いや……実は今日はちょっと寝坊しちゃって。いつもは二十分早い快速なんだけどね」

さっきまで威勢が良かった彼女は、バツが悪そうに腕時計を指さした。女性物の腕時計はパツと見で時刻が分からなそうだったが、ほっそりとした白い手首に銀色の時計は良く似合っていた。

「悪くない時計だ」

褒めるつもりもなく呟いたが、彼女は「お父さんがくれたの」と照れ笑いをした。そのトーンにはまだ子供っぽさが幾分残っていた。いい家族に恵まれたんだなあ、と俺は少し彼女が羨ましくなった。

電車は、残念ながらスムーズに下北沢駅に停車した。

「えっと……じゃあ、また」

「ん。またね」

ホームに吐き出されて後ろを振り返ると、彼女はこちらに向けて小さく手を振った。俺は一瞬迷った。が、柄でも無いので振り返すのはやめた。

来週から一本早い快速急行か。面倒臭いな。

(了)

